The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞片岡利博著『物語文学の本文と構造』
Author(s)	川崎, 佐知子
Citation	語文. 1998, 70, p. 70-70
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68929
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹　介

片岡利博著『物語文学の本文と構造』

川崎佐知子

「本書で一貫して私がとったスタンスは、私の前に確かに存在している本文に徹底してこだわる、ということに尽きる。」片岡利博氏はご著書『物語文学の本文と構造』をはじめるにあたり、明確な方針を掲げられている。たしかに、本書には、氏の徹底的に本文にとりくむ姿勢が、全篇に貫かれているといえよう。

『狭衣物語』研究は、土台となる本文研究の決着がつかないために、進展を阻まれてきた。おびただしい異本群をまえに、第一系統本文こそ原態を伝える最善本と唱える三谷栄一氏の説と、第三系統本文が原態であると主張する説とが対峙したままで、依拠すべき本文は何かという結論はいまだ下されていない。このような状況に対し、片岡氏は、「近代の日本文献学は、本文の優劣ということについて、原作者による原本文こそが最善本であるとする考え方に何ら疑いをもつことなく今日に及んでいる。しかし、少なくとも物語の本文に関するかぎり、そうした考え方はすみやかに反省されなければならないと思う。」（本文一一二頁）と、従来の本文批評への疑問を提示された。そのうえで、近年の長谷川佳男氏、中城さと子氏、後藤康文氏らによる新しい本文研究を高く評価し、これらの研究に顕著な各系統本文を丁寧に分析する態度にこそ、従来の方法の限界を超える鍵が隠されていると説かれる。では、片岡氏自身は、本文の先後優劣の問題についてどのような見解を抱いておられるであろうか。「私は、物語文学の本文に関しては原作者によるオリジナルの本文をもって最善本であるとすることはできないということを強く主張するものであるが、それだけにいっそう、われわれは異本に対する周到な目配りを怠るわけにはいかないのである。そして、混沌とした本文批評の現状において、どの本文に依拠してどれだけのことが言え、また、どこから先のことは言えないか、依拠した本文の性格が論の有効性に対して加えてくる制約ということについて、各論者はもっと自覚的でなければならないと思う。」（本文一二七頁）と、はじめに紹介した「私の前に確かに存在している本文に徹底してこだわる」という方針を強調される。既存の本文研究とは画する立場から、各異本に表れているさまざまな読みを探る、これが氏のいわゆる「形態学的本文研究」なのであろう。本書第Ⅱ部「狭衣物語異文の形態学的研究」は、その実践であると思われる。

本書第Ⅰ部「物語構造論」の第一章と第二章は、片岡氏の比較的初期のご研究の成果であるが、眼前の本文そのものにこだわるという読みの姿勢はすでにみえている。従来の『狭衣物語』の研究史で繰り返されてきた「構想論」や「影響論」に対して無関心な態度をとりつつも、それがためにかえって、本文への深い解釈が際立っているようである。

このほか、本書には、『とりかへばや物語』に関する論考（第Ⅰ部第三章）、『源氏物語』の本文研究（第Ⅲ部）が収められている。いずれも、片岡氏の物語異文への問題意識が基礎となっていることにはかわりない。ご著書を通して、『狭衣物語』の本文研究にとりくむことの難しさをあらためて認識するとともに、氏の明快な論証方法におおいに学ばせていただいた。（一九九七年四月、和泉書院、三〇一頁、定価一一、五〇〇円）

――本学大学院博士後期課程――